

【研究名】:愛媛県での抗菌薬使用量サーベイランス

【目的】

強い抗菌力や広いスペクトルを有する抗菌薬が登場し、感染症治療に効果をもたらしている一方、抗菌薬の安易な使用が MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）や MDRP（多剤耐性緑膿菌）を代表とする耐性菌を増加させる要因となっています。効果的に抗菌薬適正使用を推進する方法として、抗菌薬の使用量を定期的に調査すること（抗菌薬サーベイランス）が挙げられます。抗菌薬使用量サーベイランスは単に使用量を報告するだけでなく、使用量推移を図示することにより使用量増加が把握でき、抗菌薬の使用法について再検討を促す手段として有用です。しかし、耐性菌は伝播していくという性質上、単一施設内だけの取り組みでは限界があり、地域としての取り組みも重要だと考えられます。そこで、本計画案では愛媛県における抗菌薬適正使用の推進を目的として、愛媛県下の病院で抗菌薬使用量データの共有を行い、抗菌薬使用量サーベイランス実施前後における抗菌薬使用量に及ぼす影響を調査します。

【研究意義】

不適切な抗菌薬使用を減らし、また消毒薬の適正使用を推進することにより、薬剤費の削減、ならびに耐性菌の抑制が期待されます。また、個々の施設のみならず地域全体で抗菌薬適正使用を推進するため、情報を一括管理・共有化し、薬剤耐性菌蔓延の防止に努めることを目標としています。

【研究内容】

愛媛県下 11 病院（住友別子病院、愛媛労災病院、松山市民病院、松山赤十字病院、県立今治病院、済生会西条病院、済生会松山病院、県立新居浜病院、県立南宇和病院、四国がんセンター）で各施設の注射抗菌薬、内服抗菌薬の使用量を算出して、施設間の動向を比較します。また、そのデータをもとに自施設での抗菌薬適正使用を図ります。

【研究期間】

2010 年 11 月～2015 年 10 月までを予定しています。

【患者さんの個人情報の管理について】

厚生労働省「疫学研究に関する倫理指針」に基づいて患者さんのプライバシーを守るよう努めています。結果の発表や出版に際しては個人が特定できるような情報は掲載しませんので、患者さんの不利益となることはありません。

【研究実施体制】

愛媛大学医学部附属病院 薬剤部

教授 荒木 博陽

准教授 田中 亮裕

室長 渡邊 真一

薬剤師 木村 博史

薬剤師 田坂 祐一

【研究成果】

カルバペネム系の抗菌薬使用量および使用比率と耐性率との関係を検討した結果、耐性率が低下している施設では抗菌薬使用量および使用比率も低下しているのに対し、耐性率が上昇している施設では抗菌薬使用量および使用比率がわずかに増加していました。これらの結果から、カルバペネム系の適正使用の推進が重要であることが示唆されました。この成果は愛媛県病薬会誌 113, 5-9 (2013)に掲載されました。